地獄第七界に君臨する
大王は地上に顕現し
人体宇宙の中枢に
大洪水を齎すであろうか

金石稔
頭山天
山口哲夫
宮園マキ

李綾織
坂西真弓
紙田彰

第二号 略称フネ

地獄第七界に君臨する
大王は地上に顕現し
人体宇宙の中枢に
大洪水を齎すであろうか

50.12.15

春雷・青空・九月・献身
金石　稔
呪縛の宮殿
鈴　天　山
きれいな海
山口　哲夫
二日酔い
宮園　マキ
天 則 犠
冬　綾編
恋の柩・神の手
坂西　貞弓
魔の満月 河図洛書・見夢録・楽天地・貝殻伝説
紙田　彰
装　幀
伊藤　敏夫

春雷

金石　稔

きょう海の鼓動ははじまる
一匹の蜂がそのなかに巣くう

寄せかえす陽にあらがい
子守唄に虹はかかる

青空の底からのびあがる冬の河
歯ぎしりのまわりの千年
森に点めつする無数の木々

もりあがる心臓のなかを
いま
春が通る
微笑と落雷とを連れて

回想にそっとそえられた手の
影ふるえ

夜のように
ふるえるひとたびの人々

耳そばだてて
けれども動こうともしない三月

青空

おおらかな羽ばたき、青空よ、刻々と夜にしみ入るおまえの喉のうごめきが、あすも、あるとすれば、七色に仕上げられて、群れいる緑の麦穂と月の黄金。まばたきのかげから駈けよる馬と雲のように、円形の瞳を持った枯木の根、さても世界の失恋のすべてが、化石の葉紋にこめられたらしい。夢みる赤い屋根のサイロやせりあがる坂の、あわいに生まれる海のしずくの奥にも、へめぐる半島、朽廃船いっそう、二つの太洋、防波の冥想があると。いま次なる世紀の交配におののく指話の人々が、群鹿のようにはじらう。ここでも、午後の眠りが、あるとすれば、大地の平和にほかならず、放り上げられた幾

晩ものささやきの角度は、四季、おりおりの遠洋へ（とは、煙たつ食事と盆栽畜木をつちかった塩に）くりかえし、おちこむ。岩壁の悲い出や陽の子孫たちまでが、どうやら、柔らかな未来へと引きずりこまれている。花々しい水平線に、これらは吊り下がっていた。

九　月

たびびとよ
あなたは岸辺を行け
自からに堀り下げられ眼よ
二つの天のように
おしよせる海牛の
デッサンを抱いて

いま一つ
失われた形と皮膚の色彩について
みちたりた言葉をそえる
天然の風のなかに
老衰やあくびに似た

透明な白布の
うねりが残った

ひとたびのひとびと
永遠の砂時計の下に
のびのびとして
木立の影は伏せる

知らない
銃声と耳のなかに
不滅の海があるとは

あなたの指は
もう
あわだつ
貝がらよりも
深みを指させる

河口には
音のないぼくの胸が

あるばかりだ

献身

薄明をついて遠来の客、潮風、一少女の鼻腔。真上に小鳩の乱舞。翼にそって生ぐさいフリルと新たな空気のもりあがり。夢ゆるやかに運河は急ぐ。海峡につながる木肌のあらわな小橋、ぼろをまとった点景の少年たち、彼らの占い術、白昼の声はまだ姿をみせない。遠くで窓という窓は開かれ、投身者の幻、走り去り走り来る無人の帆舟、海一滴による呼吸、みいられた冬の冷静。街並は目覚め、無数の寓話をもたらし、火のないひとつの飾台をめぐる。水色のリボンやらシンドバットの森、冒険にみちあふれた星屑とともに。蹴の外では、憤怒の天使が、愛惜のむくろをねつかせ、また前世紀へと辿る坂道の向こう、古い廃舎にある限り、牧草の芽をめぶかせる。

卓上時計のひびき、一連の海女たち、かなでられる農夫らの収獲の拍手が四季が、これら一切の晩秋、落日を待つ唇。天おおう懊悩の雷霆、黒、渦巻、と思えばさみだれてくる俺の愚劣な野辺の午睡、そして足跡が残るま

まの宮庭、つる草、矢窓。談笑する古装束の影たちと喊声、唯一の墓地に似ている嵐は、もう去ったのか。彼らの皮膚と箴言は…。古色定まらぬ酩酊者たち。鉱石。地の百合を踏みしだいていく顔、そりかえる手首と血もようの剣。灼熱と砂だ、あいもかわらず夜がうずまく流城、天使のゆあみには、鉄の爪とステンレスの眼だ。はしけに降りつみ、静かな、肉体の点めつと誇り。蹂限のない音楽、愛情とつつましい太陽の仕草と墓碑、枯れ落ちたままの蕾(つぼみ)、やがて雑多にきらめく酒宴の暮色。また、肌と雪原のあけぼの。静けさと動き、これらすべての花びらと城、自然と凋落、昔ながらの追憶と情とに、二股かけた冥想なら、慈愛の友綱とさけめに見込まれもしよう。だが、あられもない大平原の裸族の廃墟だ。冬の頭にほほ笑ませて、野卑な抱擁、永遠の群落。草食動物の夜営(キャンプ)と小舟(カヌー)の旋回、戦だ、瞬間の微熱のうちへと旅立つ、それこそが、未知か。夢ばかり戻る老いと花環。天幕。小波をまね、春雷をまね、性格をきたえる。眼に映る女たちのステップを、きめこまやかな数学を?もう消えた。ぼくのなかの、不滅の搏動と、

堀り出された驚愕とは……。

呪縛の宮殿

頭天山

（ひひひ　なんの抜かりがあるものか　神殿の西南西に奉ってある甕の中　永却の焔とともに背教の生き物が護っているわさ……

若者が獰猛果敢なる軍隊を率いて打ち破ぼした怪物は死の間際に瑠璃しく輝いている花苑や香ぐわしい風また若草色の唐草の絡まる円形の城壁の奥から聞える華やいだ乙女たちの唄声に抱かれて〃泉の甘い水を呑んでいる貴公らの駿馬を見るがよい　赤毛の悍馬どもがみるみる黄金の彫像に化身しているではないか〃と叫びながら次の物語を開示する

（儀らの来歴は神々よりも随分と古くいわば人々のよく口にする謎に充ちたものなのだ　儀らの躰には細胞というものはなく御承知のように形状などというものとは一切無縁である　儀らは貴公らが考えている以上に複雑な法則によって存在している　その法則こそ謎の中枢なのであるから詳らかに述

怪物の呪縛によって実に数千年の荒廃を余儀なくされていた城は栄光も彩やかな祝福に充ちて蜃気楼のように荒涼とした砂漠の真ん中にその華麗な姿を浮かび上がらせる

（神々の遣し給うたあの若者は受胎と出産との死と復活との暗い渓間から聖なる肌着を盗み出したであろうか……

（否　かつてそのようなことはなくただ我々こそが彼の者の躰をそれで包んだのである　誓っていうが我々の秘術を尽くした生体実験の段階ではアキレウスの細胞には渓間の記憶は誌されていない……

（なんと彼の刑は施されてしまったのか　では若者の撓やかな肌は何処に蔵ってあるのだ……

べる必要はないがただ貴公らのみる夢のありようと儂らの生殖の原理が完全に一致しているだろうということだけを申しておこう　さて儂らが呪縛していたこの城こそは神々が両性具有の美神のために造られたものである　それは永却の輪廻を徴す無限の円形によって形造られたことでも了解されよう　大広間の壁画には想像を絶するような種類と数との生命がさながら襞布のように歓喜を迸しらせ庭園や大小の部屋とりわけ神殿に置かれている幾多の彫刻は凶凶しいまで実に生き生きとしている　不思議な按配で天空に吊り下げられている浮上遊園には大規模な噴水や漏刻が七色の光をふり撒き毒毒しいまでに見事な色や匂いや形をもつ植物が咲き乱れ可愛らしい表情をみせる小動物たちは灌木の茂みからその顔を覗かせ最も美しい声で賑う鳥どもは華麗なる飛行の姿勢のまま宙宇に貼りついている　おお空前絶語の空中楼郭よ　確かにそれは蜃気楼に相違ない　なぜならばあらゆるものが完璧な美しさを備え不動の命を保っているからだ　そうなのだ　この城こそは死者たちの恐ろしき居城である　貴公らの馬が黄金の彫鐫になってゆく様を見るがいい　正確に事物を見極める眼に祝福あれ　ところで神々は儂らを最も醜い生き物として蔑んでいた　儂らが宇宙の誕生の素であることを憎んでいたのである　だが儂らを滅せば神々の箱庭どころか神々の存在すらも危くなることも同時に知っていたのである　そうだ　儂らは第一原因なのだ　それであるとき神々は儂らの前に現われて次の様な取引を提案した　〃邪悪なる者たちよ　私はお前たち以上のものではない　かといってお前たち以下のものでも決してない　なるほどお前たちは第一原因であるかもしれない　また形状のないお前たちの方が余程事実なのであるかもしれない　だがそれが一体どうであるというのだ　お前たちと私

のどちらが原因であり結果であってもまた事実であり夢であったとしてもそれは別段なにものをも更改できる筈がない　だが宇宙生成の目的について考えてみるならば私たちは高遠なる意志と智慧とによって善と美による至福の王国を打ち建てようという愛れた熱情にあふれているのに比して木偶の坊であるお前たちはただいたづらに原因であり事実であるに過ぎないではないか〃　儂らは極めてもっともなことであると思った　だから儂らに何をしろというのかと問うと〃私たちは宇宙の偉大な運行に従ってお前たちの立場と私たちの立場を交換しようと思う　私たちの世界である安らぎを代償にしてお前たちの罪に充ちた世界を肩代わりしようという訳だ　お前たちにとっても静かな眠りと空想のうちに悠久の時間を貪っていた方が幸福というものではないか〃と有無を云わせぬ要求をしたのである　儂らはこのようにして永久に光の世界から遂われた訳だ　確かに儂らには高い理想もなくただ成り行きに任せた生き方をしているのであるし儂らの定形のない肉体にしたところでそれに見合った何ものもない漠とした世界の方が環境として最適なのだから文句のつけようなどなかったのである　そうしてどれほど厖大な時が流れたであろう　何の不足もなく勝手気儘に暮らしているとある日儂らのうちの比較的年長のものが苦痛を訴え始めたのである　このようなことはかつてなかったことだ　儂らにはどのような苦痛も絶対にありえようがない筈なのだ　だがそれは短期間のうちに族の全体に蔓延してしまったのである　儂らは儂らの躰を綿密に調べてみた　すると儂らの躰のある箇所に極めて小さくではあるが活発な増殖力をもつ細胞ができあがっていたのである　無論儂らには定まった形などなかったのであるからそのような物質ができると堪えようのない苦しみに襲われる　儂らは

相談した挙句にそれを呪縛することにしたおおその細胞こそ貴公らが解放しこれから赴こうとしている宮殿なのだ　儂らは自分たちを小さな細胞に向けて開いてゆきその結果宮殿を呪縛したのである　それまでの宮殿は黄金と宝石と氷の性質に従ってあらゆる生命を瞬間の器に封じていたのだ　だが儂らこそ無限の器であることを肝に命じておくがいい　神々は儂らが古巣に戻ってくると同時に奴らの居るべき世界との中間で宙吊りの憂き目に遇いそれでもなおこちらへ戻ってこようと躍起になっている　そして例の秘儀を執り行って貴公らを差し向けたのだ　儂らを最初の契約通りに永久に閉じ込めておこうと　だが考えてもみるがいい　あのまま儂らの形状が細胞によって造られていくとしたら宇宙全体がどのようになるのかを　あの城の中で貴公らを抱擁し接吻の雨を降らせることになっている乙女たちはあの泉の水と同じように貴公らに永却の美という祝福を与えるであろうが……

かすかな音もたてずに跳ね上がった橋を後にして二つの円筒形の無数の矢狭間の並んだ塔に狭まれた拱門を潜ってゆくと永却回帰を示す宮殿が聳えその上品な装飾のある入口の奥には二つの長方形の大広間が円形の広間を狭んで続き廊下のように縦に並んでいる　様々な種族の選りすぐられた乙女たちが嬲やかな肌も露わに絹の衣裳を閃かせ歓びにあふれて踊り狂っている　若者の率いる火と鏡とを材質にした四千八百八十八人の武士は剣を捨て楯を捨て鎧を解き楯や鎧を放り投げ魅惑的な踊りの渦の中に呑み込まれてゆく　二つの広間に狭まれた円形の大広間の中央には黄金の美酒を湛えた大きな井戸が堀られている

きれいな海

山口哲夫

＊

水は軒下にまでとどいている。洋食若松食堂の玄関前の鉢植えが〈和可ま〉のれんのあたりで水生植物のようにブッカリ浮いている。このままアフリカスイレンとなって溢れる雪どけ水に根を生やしそうな気さえする。看板の横に突出したストーブ煙突の下半分が満水で黒ずみ。溶けきれぬ雪くれがあてもなく不気味にただよう脆い景色のうち。西どなりの都屋洋服店のトタン屋根に三人の肩をすぼめた男が立つ。いずれも二本足のズボンに手をさし込んで弱々しく笑っている。二階のガラス戸から顔をのぞかせている老婆も笑っているが。あるいは得体の知れぬぎょうぎょうしい叫び声をあげているようにも見える。これらの人々は充分に撮影者の目を意識しているがかれらの視線をたぐり寄せてみると必ずしも撮影者の視座とは一致しない。道路の中央にはほぼ電柱の高みにまで達した雪塊の島があり。島から島へとかけ渡された丸木橋の畔に水害避難所と書かれた杭がさしこまれてい

る。その墨書きの文字に隠れるように防空頭布をかむった男少年がふたり杭の根元に見入ったようなふりをしているが。あるいは近在の農家の老人の喰ちくぼんだ肩なのかも知れない。瓦ぶきの大屋根に消え残るざら雪がつややかな濁り水の表面に影をおとしてさらに新しい氷の島をなしている。これ以上かさを増すような形勢はないものの濁り水はゆるみなくこの国のこの区画をおおっていた。逃入村の濁り水。西方の突きあたり小丘陵の麓に望楼のようにそびえるなぐら堂の白い壁。その傾斜の具合はまぎれもなく夕暮れの脱臼の刻を指し示している。

＊

これは駅前の坂下旅館だろうか。うってかわった二棟のおごそかな傾き。三階建築の二階楼までをほぼとどこおりなく浸したあふれ水の面を引戸や看板類の残骸がすきなくおおい。たばこぼん便器類。さらにしゃぼんの箱。撮影者はちょうど坂上にあたる来迎寺駅の改札口を喰りたあたりに視座をすえたのだろう。手前から雪塊が白い砂浜のように傾斜を伸ばして。そのかくしゃくとした囲繞感にはそれが今まさに溶けつつある偽の陸つづきだと

はとうてい信じさせないものがある。しかしここには地勢に従った漂流性がみじんもない。奇妙につややかに。なまめかしく害されたままそこに焼きつけられている。

＊

この均整のとれたおおらかな建築物は南方の酒造家（つくりさか）。雪くれの島から水を跨いで中棧の小屋根にかけて頑丈な木の編み橋が渡され。その上で八人の男が記念撮影ふうに一列横隊をなしている。うち復員帽に黒眼鏡の男が明らかに虚脱した様子を見せているが他はなごやかな笑みをたたえ。かたわらで気をつけをしている綿入れの男少年（わらし）二名はどこかほこらしげでさえある。隣家の中屋根からこちらの岸へ慎重に跳びこえてこようとしている中年女のモンペがぶれている。

＊

これはなんというプラットホームだ。来迎寺の停車場の駅舎であることは確かなのだが。上り一番線と下り二番線の間の通路にみなぎったあふれ水がカンテンのような膠着した輝きをみせて西方の小丘陵の麓まで縦貫してい

る。一番ホームの白線の後ろの雪塊群の前に五つぼたんの五人の駅員が斥候のようにたたずみ水面下の四本のレールを見降しているが。皆一様に制帽の下の顔を崩し白い歯をみせているのがいぶかしい。あたかも無人の二番ホームに視座をすえた撮影者が水路をへだてて飛ばした洪水に関する冗談に五人がいっせいに反応した瞬間とでもいったふうに。かなたの跨線橋が洗われたようにくっきりと浮んでいるが。ここに多数の避難民でも鈴なりになっていればまっことロシアの絵そのものだ。あたりに黒い鋼鉄車の姿が見られないせいだろうか屋根の上に消え残った雪をまばらに置いたこの駅舎はどこか突出した頂上感をさえただよわせている。それにしても何という走路の水面の平静さだ。

＊

一般の木舟が浮んでいる。背景にかすむ裸木の並びぐあいから水田地帯とおぼしいこの辺り。撮影者のいる雪塊の陸つづきが湾をなしこちら岸から向う岸にかけて一本の白い糸のようなものが張られているのはなぜだろう。舟上には手拭いで頬かむりした漁手と耳を隠す防寒帽を

かむった漁民が四人。そのうちの一人が白い糸をつかんでこちら岸を見すえているが白い糸の先をたぐっていくと向う岸に黒眼鏡の男が一人両足をきちんとそろえて直立している。その逆光のマント姿の異風にはかれが何事かの使者であることを濃厚にうかがわせるものがある。舟上の五人の漂流者の顔面に少しも笑味が浮んでいないのは要するにこの白い糸によって伝えられた〈指令〉によるものであると断定してさしつかえないだろう。

（聯作妖冥譜のうち）

二日酔い

宮園マキ

日は　うららか
苦い苦い珈琲を啜りたい
私は外套の襟を立てる
過ぎていく『春』の悩みを語りたい

最初は血だ！　と友人がいった
空耳かしら
ピーポーピーポー
人が死んだのかもしれない

ふびんだけれど根なし草は枯れる
酒を飲みたい　お酌！　お酌！
私の舌は水では生きていけない

十円飴屋で小銭を食べたい
ほほえみながら　また朝湯
気ばかりつかう先例と私は一緒に歩かない

☆天則犠

李　綾織

（渡邊小枝子に愛を込めて）

☆婆羅門 brahman の神々は一般に人間を超越した神性を具え強力賢明で光彩に満ち不死で永遠の若さを保ち正義に味方し悪魔や怨敵を退治する『然し同時に多分に人間味を稱え神妃に侍づかれ　Le drapeau va au paysage immonde, et notre patois étouffe le tambour　信者の捧げる神酒ソーマに酔い』最大級の美辞を連ねた讃歌を喜ぶ、工藝神トヴァシトリの造った金剛杵（一種の武器）を掌にして名馬ハリの牽く車翔を疾らせ誇らかに天空を闊歩する其の行動は必ずしも道徳的に完全無欠とは云えず稀には邪婬や不和そして暴行などをも示して居る、婆羅門 brahman の神々と人間との関係を観

るに人間の運命や苦樂は神に依存すると考えた、神は人間の邪惡を罰するが贖罪するものの罪は許す、神々は一般に【人間に対しては寛仁大度を示し Aux centres nous alimenterons la plus cynique prostitution, Nous massacrerons les révoltes logiques 親睦友誼の情が在り】恩惠に満ちて居る、峻厳な律法神ヴァルナが亞利亞人一般に恐怖の念を抱かせ畏敬されていたのが唯一の例外で在った、婆羅門 Brahman の神々は概して明瞭な個性を欠き寧ろ同一の属性や呼称そして業績を共有して居る、如何なる神も讃歌の主題と成った時には至上の讃辭を受け丸で他の神々の上に君臨した様にみふるではないか☆

〈了〉

NOVEMBER — 20th — 1975

恋の柩

坂西眞弓

炎のうちにどんな秘儀があるというのか
婚合の壁画と古代神の立像とが
高窓の鎧戸から洩れる　紫色の
光の箭を浴びながら
黄金の巨きな卵に呑み込まれる
肩まで垂らした艶やかな捲毛が
胸の双丘を蔽うと
老女は生涯の枝脈を遡る
そのひと滴の中には　邪悪な舌をもつ
火蜥蜴の王国が匿されている
没薬に涎かされた息子らは
閉じられた芯になおも漿液を注いでゆく
破局は来た
それはなんという紅蓮の効果だろう

神の手

その色彩を愛するものにとって
深い夜は幸福である
天文台の円天井は四大に囲繞され
アルタミラの洞窟は
母の袋のように癸水にあふれ
蕁麻には黒燿石でできた大鳥が向かう
だがなんという掌の変事だろう
真夏の毒に熟れた天球は
肉と銅とを秘めた剣のように
宿命の悲恋を祝いでいる
識神は
夢の尚なる旅路へと
生贄たちを導いてゆくのだろうか
あの澄明な空を逝く満艦飾の星々のように

連作詩篇

魔の満月・第三部

紙田　彰

河図洛書

低く垂れた倉庫のゆくりなくも満潮の迸しり　月下の海面すれすれに増殖してゆく二重三重の扉　まるで真夜中の河沿いに閉浮提の空言が閉じられてゆく　ひとがた狼の凍りつく牙の暗示　おお狡猾な幻惑の逆しま　だが前兆だとか予告だとかの幸福な烙印は落とされていない　七宝陶器に封入されている書物のメモリアル　蔦紋様の暗箱に映る宇宙の空腹　それらの蓋付きの円筒に書物を潜むラベルが貼られている　視神経の傷ついた細胞のひとつひとつにもまた　だがそのような博物学的な書棚の道筋にかつてないほどの索引が彩色豊かに蔵されてゆく　洋服箪笥を入口にした玩具の王国　天上圏に棲む魔の使徒ども　おお穴と穴　おおそれほどの衍文　翻ってみれば家畜小舎を湿らせる脂　五芒星呪の小道具をそもそもの発祥にしながらゆけども弾条の微かな波形　密偵の暗躍する古着屋の通

りを抜けて一軒の書肆を訪れる　枯れ葉を伴う渦巻がけばけばしいポスターを破棄すると木目が神秘主義的な模様になって現われる　少女が図書目録を閲覧する　ウィンクしながら聖典アベスタの所在を確める　莞爾として応答する異様に背丈のある若主人のかたわらでこれも背の高い美貌の細君が鏡を覗いている　石化した鏡の世界しなやかに燃える火災現場の夜よ　墓場のせせらぎとは運河の名残りである　青白い数百もの燭光を照明にして廃墟の伽藍がぽっと浮かぶ　闇に吸われゆく鍵の銀流しと地下室への階段　ドッペルトゲンガーの徨う粗末な街路が拡がる　その際で眩暈に充ちながら硬質の滑らかな表面に猟奇・錬金の淡い釉薬をたぶらかせて淫奔なる陶土の羅列が朽廃している　漆喰を好んで這い上がる架空植物の繁雑さは沈静などという俄仕立ての廻廊とは異なり画布に塗られた離破図とともに無数の蛇を受胎している　まさしく海底住居の前庭にあらゆる顔のままただ一条の白線のたゆたひ　海胆から発する分泌海上の飛沫に埋もれながら渦紋をなす怪鳥の群　靡爛をつづける生体の波間に死と誕生の溶け合った香料が供えられる　白百合と黒薔薇の遺愛に包まれた裸身の女神　おおその祝福すべき刻限よ　造物主

の首が倒ぶ　水底の葱や大蒜から交響楽が洩れる　書物の角はまだとれない　林立する朽木はなだらかに謫居されゆく真砂に均合いへたへたと堆積する　この執拗な調整は脱誤の劈開面にみられる汎神論風土であるのか　諸子の青黒い呼吸器に見たててこれもまた衍文に過ぎない　寸足らずの異質な人物は消去可能だ　鏡によって構成される宇宙のとばぐちに朝月夜の刺青が美わしい　秋は回覧板とともに訪れる　切り立つ降起に塞ざされた淡水湖の岸辺で水平に幹を伸ばした灌木の茂みが重厚な濃気を漂わせている　黄色く反吐あげた西の空一面に棘を撒きながら白鳥が飛んでゆく　狭い間道沿いに清澄な湖を巡りゆけば銀色の腹を月光に翳してぴちぴちと魚の戯れる涵養の水域が拡がっている　そこで年代もののコニャックを傾けよう　ビール壜を叩き割ろう　足首の形をした灰皿は不義密通のある種の薬学理論によって捏ねられている　たんぴとの記憶をも退ける脅句・冗談のうちに恋人を求めて入水した少女の惨い伝承が残される　モニュメントとは達筆な案内状だ　青銅の人魚像は疾うに孕んでいたのだから　それゆえ茫漠とした悠久ではなく俄然明瞭なる輪郭を現わし古代の景観を圧迫している　氷河期の吃水線は好色な

分類表であるにしてもソロモン王の壇にはたして夢の材質は詰まっているのだろうか　机上の頭骸骨には一切の通信機器が組み込まれその楕円形の帽子に太白星の軌道が印されている　まるで前世紀の巨大な建築物を嵌め込んだ羊皮紙の伝説のように　目配する数百のフランス人形のコレクションはさておき花柄模様の大陸移動の痕跡が鏡部屋の円天井に浮かぶ　賞味すべき巴旦杏に宿る世界聖霊よ　学究猫の首には鈴が肝要だ　判別できぬほどの惨めな打撲を与えよ　強化硝子を滋養にして育つ芽よ　見事な毛並を逆撫でし吸い殻のように加筆せよ　瓦礫の割れ目ごとに刻されたものこそ理法を越えた暗号　アマルガムの突飛な夜　火の球からこぼれおちた地球　振子に装備された殺意と兇器よ　海底に遺された幾何学的な通路が透明な大理石を皮切りに失われた王国を悼んでいる　咽喉仏は呪縛の突端である　そこには船具などと等しく粘膜を防護し毒物を吸い上げる乳白の液体が塗布されている　だが牡蠣の殻に刻まれている象形文字はその近傍独特の食肉海藻の所在を秘している　氷点下の海流のうちに熟す果実は黄金の唾液をしたたらせる　それゆえ一層濃度のある塩水が湧き出るのだ　塩分に限らず艶斑のあるものの浮游

天鵞絨のように横たわる大陸棚は文明の遺難現場である　古代都市を載く大河　赤土に塗れて出生の源へと馳せてゆくのか　おお地図の鼻孔よ　壇の中に突き立つ首よ　鞭毛の一面に植わる胃壁の海岸から一海里離れるとそれらの亀裂を隠匿している大陸棚の底から分泌腺のすさまじい破裂音が轟く　衒学的な大陸を頭脳のうちに建立せしめて出生の源へ翔せ抜けてゆこうとする人非人・ひとでなし・ひとがたの夜空は果たして満月の奇怪な実験に展かれるであろうかその累々たる歴史的な土壌形成とは塩分結晶のなんという建造物　また山脈と海とを分かつ綾羅錦繡のなんという母胎　だがその裂目に厖大な空洞を造り数億に及ぶ痛点の網羅に浸蝕してゆく頭足類　おお眩暈と嘔吐の灼けつくような紺碧の天空に石炭袋のあの滲みが連鎖しながら訪れる　びかびかした液の中で硬化する腔腸類　宝石箱をひっくり返しての乱痴気騒ぎ　海底住居の中枢にはいづれも光彩を除外した佯狂の乱舞が施術されている　紙片に紙片を幾重にも挿入してゆく　おおひときわ雄大に聳え立つ古代文字の精製塩　骨盤は疾うに神々に逼迫している　絡み合って海溝を迷路に化する屈折率と半植物の図解のほころび　視力検査表に貼りつく獣神は外套

の背後に不吉な命令書を縫いつける　それというのも屹立すべき火山帯がメビウス環のようにあまりに永却の饒舌に拘泥しているからではなくそもそも種の起源に関与する信仰と法制化がドームの中の酸素消費の度合いを三拝九拝にしたからである　したがって石灰をその素とする海中はいまや雪崩である

見夢録

マミ夢メモ　魔行の曼陀羅の投影図法の歴史の鍋よ　記録表の数字が手術台の極彩色のたおやかな光の女どもに永遠の四捨五入を迫られている　だが統計学は事件簿に等しく転変の堇色から零へと垂れるであろうか　親族の夜は古代から不倫の車輪であり劣悪なる壺の芯棒である　父の帰る頃の王宮は肥満体の花どもによって性器がしなやかな鞭である　数台の自動車に分乗してパーティの証拠隠滅を画策すべく銃火器を用いて深夜を警備している灯火を殺害する　おおその背にマッターホルンのように聳え立つジャックナイフよ　曲

芸人の肘には殺人事件の筋肉が聖衣さながらに感光している　頭骸骨を揺でよ　机上の宇宙モデルの頭骸骨を揺でよ　それは古代のランプである　またそれは巨人伝説の魔法である　それから頭蓋骨を展げよ　その中には記憶の寸断という美酒があふれている　前後不覚の電線の路地という路地にどろどろ腐蝕した蛸や蝙蝠や爆台の足が吐かれる　美貌の少年たちの美貌の臓腑よ　おお紺碧の疝痛が尻の根元から汚濁した七色のインク壺を噴出させる　熾天使の王たる電気回路を逆さまに果実を転がしている共有結合　巧妙な打楽器の激しい列車は真空管である　鏡板の迸しる涙が切妻敷桁を封じ込めてゆく　薄暗い教会堂を陶器でできた年代ものの北欧人形が訪れるだがその老婆の胸に抱かれた枯れ花がみるみる値札を開いてゆく　頓興な少女の黄ばんだドレスあるいは雨雲の襟巻きにパン屑や造花が弾丸を飛ばす　牡蠣は人面相をしてゴシックスタイルの官僚である　差掛け屋根の南方系樹木の果実は黄金のコンソールテーブルである　それらは第一夜の所業でありとりわけ第二夜には部屋の勾配に倒れ込む資産家の失跡が宣言される　四柱式寝台に招待された被害者と追跡者は擬不活性ガス構造をもっているであろうか　羽目板

には留め金と刃が薔薇窓である　目撃者が解剖される密室の若主人の狡智にはマルタ十字が輝いている　二重の殺人事件は腕時計の鎖に入れ替わる　ミイラは実は縊いぐるみのピーカーである　指の切れ端と腕の破片が外套の正体を十二時に射撃する　おお帝王の偽装工作は完璧な首塊であり聖衣には紫水晶の占術が見破られている　律動する肉の衣裳のひと筋の紙片に入れ替わる有価証券　無水珪酸の丘陵の高熱太陽は長距離ランナーの全力疾走であろうか　緑色の半導体に強姦された公園は幼児性の退行であろうか　だが集団トレーニングは順調なダイビングタックルの花冠のままである　樹令数千年の幻の光電管に自転車の轍がくっきり残っている　永久硬水は浮遊している肉の規律とともに煙幕戦術である　おお純粋事件よ　ルーイスの創発的電信器よ　脚部が陰陽の致命的な運行のただなかで開いてゆく　天使の貌をした湯気　裸足が物置小舎の中に脱ぎ忘れられる　その荒冢は平行線の廃糖蜜に不吉な矢印を添加する　失速する宇宙よ　銀河の断片よ　夜行列車の光芒に出現する楕円形の植物園のとりわけて第三夜　中央の通路で芝生が蕾をつくっている　その帯を解きながら集団行動の最後尾から順繰りに道を外れてゆく

少女たちの教室ではグロテスクな実験器材とともに回り道の分だけ乳房が蕾撒色である　駅の構内は終点の天国なのだろうか　だが神経症の樹木の枝や根が雪の厚い接吻の地下からめらめら伸長しはじめると沼や池は呪文のうちに塞ざされてゆく　薄氷の岐れ道を辿る兄弟は落伍したままアブラハムの子であるダビデの子のように肥溜に漬かり込んでいる　二階家の一階は汎神論的な密偵である　熱湯は母と妹たちに向けて投擲される　空に架かる拠物状の金曜日は地球の分身である　皆既蝕は電話魔の横行である　王侯貴族といえども結末には微粉末の華燭である　夢とは確執であろうか

楽天地

栄光は薄暗い小部屋の中で瞬いている　はしゃいだ子供たちの頬に口づけよ　廻転木馬に跨りながら　河辺の遊園地はきらきら光る朝陽とともに健康である　妻の名を冠せられた橋を起点に禍いの橋や

粗忽長屋の棟を眺め静かな海に向かって冒険の道が伸びる　それは母への精一杯の婚礼の挨拶である　その昔工場から直送された麦酒がほろ苦くドイツ風レストランで蓮っ葉な商売女と一緒によく泡に濡れたものだ　山師どもの跳梁した時代　慟哭すべき略奪の季節よ十九世紀の晨光の下で王の墓が開封される　燥竹が小うるさい銀蝿のように南風の中で鳴る　骨董品は蘇生し大理石の階段はゆらめく烟のように天空に紛れている　AIを染織した花が咲き乱れ子供たちの真紅の血潮が雪花石膏の部屋に溢れる　石版の昏がりで幻の水晶球が素晴しい色彩の光を放つ　半盲の詩人にとってそれは高貴なる廟である　老婆が聖刻文字で印刷された入場券を売り歩く　甘い歌声が聞こえる　誘惑するのは誰か　レースの縁飾りの付いた白無垢のドレスを纏う花嫁　あるいは祖なる四大から発せられた磁力なのであろうか　写真機のマグネシウム閃光のように早朝は寒冷の岸辺で顫えている　文明の頽唐期が脳髄の渕から書物の源に梁かる綺麗な印形を残す　波止場に色とりどりのヘリウム風船が舞い上がるミルク罐を抱えて駆け出す女の児　倉庫の重い扉や棧橋を舞台にしたギャングごっこ　ときたま酔っぱらいが恐怖の嗚咽をあげる　お

お亡霊のような檜を傾けて船が出航する　廃液に充ちた海面は鷗たちの滑走路である　紙鉄砲を鳴らしていた少年の顔が蒼白の卵に変じつづいてべりっと破られる　光を浴びた魔鏡がからくたの中で死せる海を映す　精神病院とは楽しき鏡張りの迷路である　そしてダイヤモンドが金髪の乙女を閉じ込める　密室はどの岩棚に匿されているのだろう　至る所で御婦人連中が鍵束の伝説に怯えている　切妻破風とは封印の一角を毀す不吉な呪詛である　屋敷は帆船に曳かれて花散る岩窟に塞ざされてしまう　飴色の光茫を帯びた船は清涼な追風を受け何処へともなく流される　南極も夜　北極も夜　世界の透明な白夜　ジェット・コースターは銀色の車体を燦かせ遠い異国へと旅立っているだろうか　王冠の飛沫をあげ真白な波のモザイクにみられる断裁　寺院を中心に放射状に拡がる町はいかなる栄光の星を抱いているのだろう　煮込みの美味さは下呂と唐辛子の比率に求められる　劇場や寄席を擁する天下一品のワンダー・ランドはいまや閑古鳥の楽園である　朝の氷の胸板で帝王切開の航路を往く船は悉く生気を吸われ青い暗礁に至ってどんな夢をみるのだろう　びっくり箱を覗いて子供たちの眼はガラス玉に変わる　正装の夫婦

がウォッカの栓を抜く　洋灯は蛇に転身する　おお貞操の女神ディアーナよ　根太は航海術よりいっそう巧みに弛んだ櫓を押し拡げる　舌が黄色の酸液に塗れてゆく　船室を結ぶ通路は甲板からはみでた静脈の分岐である　おお凍結の寸秒に酔う　ナイルの鷹を肩に侍らせ少年たちは猛獣狩りに明け暮れる　塩と光との配合で建立された門柱には青鬚の年代記が誌される　（そんなものは一文の値打ちにもならないのだよ）　旋回する塔の鎖をひきちぎって目を覚ました少年はどこのどいつだ　いっそ石棺の悪魔に唆われてしまえ　胃を象った館は水質検査票とともに考古学者の手帳に封じられる　歴代の領主よ　その顧問官　料理人　玩具製造業者　そしてなによりも不死の子宮よ　結託して婦女子の齢を数え上げるなどは失礼千万である　目を閉じよ　耳を塞げ　あらゆる汗腺を絞れ　おお雲を掴むがごとき眩暈のうちに織物が扮飾される　市民は誤植を愛す　焔のような記憶を抱いて失楽する　家具や調度品とりわけ蝶番を誂え鳴物入りで婚礼の祝に赴こう　白地に黒を塗たくる新聞のようにしかし一段と豪華である　（赤い空に貼られた満月とそれを斜めに掠める機械仕掛けの蝙蝠が翌朝には純白の空洞に転ずる　ふふんこい

つは蝙蝠の屍を映す蝙蝠のもう一方の眼球に相違あるまい）　室内が縮む　花嫁の畢な喘ぎに歩調を合わせ　道化師が通行人の笑いを誘おうと子供たちの脳味噌をべちゃんこにする　飛白の浴衣で薔薇色の肌を包んだ小粋な姐さんが立ち止まりちらと流し目を呉れる　夕映えが看板や橋桁を染めてゆくと小児無料開放の祝日は永遠に失われる　添景には回転飛行機が眩ゆい　部屋が可憐に歪む　幻の聖霊受胎が夥しい　番犬はひと声吠えあげるとくるりと踵を返し後足で土塊を蹴って銅像のように殺風景な夜空に溶け込んでゆく　侵入者にとって事態はどのように作用するのだろう　十九世紀の深更を告げるミサの鐘はプラネタリウムの天蓋を吊る紐とともにぷっつりと断たれる　内部と外部との攪拌はもはや終了する　扉は漆喰に蔽われ箇から逃れることは能わない　事態の侵入という転末よ　緑の膨張する球ともいうべき船は荒々しい手綱手管を弄して全男性を勃起させる　この嗣とは何か　アポロン神の栄光の漿液に充ちる暗黒宇宙の華英の如き部屋

貝殻伝説

ゆけども間断なく書物はめくれあがる　タロットを用いて彼らを呼び出そう　光は失われているのだから　闇の彼方から地底の使者たちが黒い布にくるまって現われる　翼ある怪物に騎って紫の水流を渡るもの　心臓の形に切り取られた鳥瞰図を作成するもの　王蛇科に属するとぐろ巻くものの飛行のような　華やかな光が点り次第に濃厚な色彩を映し出す　使い魔たちは三種の得物を携え僧服から頭丈な貌を覗かせる　だがこれらの舞台を領する幻覚は砂粒ほどの大いさである　脳髄剝離はこのときなされていたのであろうか　夜の充血もしくは性器のようにべろりとした薔薇　楽園の悩ましい匂い空想物語の奇怪な言葉は秘密の裡に次なるシレーヌを誕生させる　満天の星は薄汚れていた　左腕を折られた酔漢が地べたに伏していた　貧血の靴蔓の巨大な袋から夢の液が浸み出ている　おおこの魔の薬草の素晴しい効用とは　端正な口許から白い犬歯をみせて上等のマントを小気味よく翻えしながら一人の紳士が近づいてくる　鋼掛物の月が超大な棹を突き立てて祝福する　神降ろしの台座は太陽

を身籠っていた　そのあたりで羊水を貯えた鉱物が見出される　それから十と三つの断崖に括られた誘惑の堕天使が鳥肌を標わせ想い出を託して細い声で唄う　のっぺりと白い渦が耳鳴りを伴って浮游する　洞窟や耳朶さらに書物の花冠へと幻聴はどろりと紅潮した旗を振る　そうして下腹部に矢印の尻尾を生やした僧職が澄み切った星空に酒気を放ってゆくのである　険しい霊気が訪れる　呑屋で高尚な話をする奴なんて嘘っ八だ　およそ大嘗をかくべきである　その昔天体配置図には目玉が抉られていた　図版には神々への傾斜と階段ピラミッドの比較が示されている　玲瓏な泉は飛蚊症に患かっている　星座を受胎した金属はその滑らかな水面から羅出する　毛を帯びた風が飽和状態の樹々の夜を掠める　灼熱の責め苦に苛まれている亡霊の唄が草の根を分け寒冷の地裂を渡ってゆく　十文字に隊伍を組み奥物状に瑞々しい翼を散らしてゆく白鳥　だがその鉄錠にも似た羽を貫き葬祭の塔は燦くオーロラを寸断しイム＝ホテプの叡智のように気高い白夜に聳り立つ　おおなおも見上げると不凍港の明けゆく天の辺を銀色の蝶が這い廻っている　淡水の海で足首が泳いでいる　ブロック塀をぶち抜いて右拳は砕ける　有史以前の獣

を網羅したバビルスはあの洪水で紛失した　男とは器だ　女とは鏡である　ああ空洞の楽天地の紡錘形の分裂直前の太陽の双生児の眼窩の子宮状の太古の花の糸滴から飛翔する星雲の楕円の航海図の秘蹟の出血よ　とどのつまり唾された単調で急速な祈りの糸りにおける頭脳の反転　眼鏡が宙を舞う　それから朝までの長い威嚇　視神経には封印がなされている　古代の人生観を語る猫目石　やわらかな伝説の奇石よ　あの石猿は蝸牛に喰われていた　氷河期が文明を呑み込む　オリハルコンは吸取紙であろうか　嬰やかな食虫花の茎こそその証拠である　食欲とは精神の骰子投げである　棘皮を生贄にした個体伝承は続けられる　人体の並ぶ天末線に雲が湧き気象台に次々と不吉な知らせが齎される　昆虫は繊細な翅を見込まれラジオの役目を果たす　もんどりうった拍子に右肩が切断される　肝臓や舌などを切り裂き奥まった十二方形の十二室にそれぞれ倒えられた鍋の中に十三番目に給仕される礼拝の煮汁が滴かっている　林檎とレモンや各種スパイスを盛り込んだソースに浸されているのは羊の肉である　聖餐の時刻が近づいている　廻廊に敷きつめられた天鵞絨の弾力層のうすびかり　ロリエの香りが発している　子供たち

はおもちゃ箱の中で契っている　玩具とは水晶体を真似た呪具だ
おお沈静の中に硫黄の烟とともに鞏固な柵囲いを越えて忍び寄る悪
徳の影　善行に励む蛭が素早く察知して吸盤を開く　預言者は失神
する　不義密通は蒼白な聖体によって推奨される　バターの脂がた
まらない　そのとき暗がりから下唇をひきつらせた妖しい首が浮か
ぶ　神託が宣べられている　おおそれは数千年の間猿馬銜を噛まされ
蠟燭の厳に鎖で括られていた女の真紅の唇　大いなる交接の器具よ
なんと螺旋宇宙の栄光の襤褸の中は駝鳥の足指ほどのペニスであっ
た　木兎・鸚鵡・鳥・井守・黒揚羽の黒焼きの屍衣を纏った酒酒な
舞踊　酒宴に酒がないというのはおかしな話だ　小僧らしいパーテ
ンよ　急いで美酒を跳えろ　禁断の鬼火飛び交う魔の渕で　膿の発
酵する沼沢に咲き毒茸と共生しているマンドラゴラが肴になろう
すると円錐形の建物の頂で半熟の文字卵がきらびやかな口腔を開け
る　からから笑うその奥に鉛のように重い呼吸器が見える　潮砂の
ような愛　肥桶の底で蹲る純朴な天使たち　胸を貫く刺罰よ　柄に
鞣皮を巻きつけた黄金の剣こそ切っ尖鋭く時を支える振子である
腐った海産物が黎明の食卓に盛られている　貝殻を盗んだ失寵者は

行き止まりの街路へと逃れてゆく　前途を妨げる五六人の若者を薙ぎ倒してはみたものの一本道で曲り角を間違える　正統な嫡子とは墓場への案内人だ　丘の公園から俯瞰する港は霧の中に封じられている　茸のように艶しい花弁から赤い毒液が流れるともう親密な明方である　そよそよと光が走る　鉱物の中を游ぐ花　王冠を載いた蛞蝓があぶくの裡に匿される　滴のように垂れ下がった単眼を嫌って巻貝は胎児を追放する　中央に三つの孔をもつ球が毛羽を戦がせ太陽へと向かう　平穏な日輪は癌細胞であった　神秘な微笑から洩れる鎖状球菌が健やかな朝を放擲する　錆びついた宝物庫に腸詰めがぶら下がり至る所の余白にはなにものかの血が供されている　奥付けに果喰う黄金虫よ　書物は何処に展げられているのだろう　失明を招ぶ薔薇鉄条の夜々

地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人
体宇宙の中枢に大洪水を齎すであろうか

第二号　略称フネ

編集発行人　紙田　彰
東京都杉並区梅里二ノ十二ノ十五
電　話（〇三）三一三一五八一三
印刷所　武蔵野タイプ
印刷日　昭和五〇年十二月十日
発行日　昭和五〇年十二月十五日
頒　価　五〇〇円

頒価 500円